

## 『古今集遠鏡』に於けるワシ・オレ

塩澤和子

### 一 はじめに

既に拙稿<sup>〔注1〕</sup>で、江戸中期の口語資料の一つ『古今集遠鏡』を資料として、一人称代名詞の種類、頻度、卷ごとの出現傾向を検討し、次いで宣長が「遠鏡」の「はし」で例示する一人称代名詞「ワシ、ワシヤ、ワタシ、ワタクシ、（私）」の4語に関し、歌人や歌の内容との関係を考慮しつつ、訳し分けの実態と敬意の度合いについて考察した。本稿では、それを受け、一人称代名詞の高頻度語「ワシ、オレ」を取り上げ、宣長がこの両語をどのように捉え、訳し分けたのか、その実態を考察したいと考える。そしてそれを通して「遠鏡」の口語資料としての価値を検証する一端としたい。

### 二 出現傾向

拙稿で述べたように、ワシとオレは、俗語訳に出現する一人称代名詞、14種類549語(延べ語数)中、上位1、2位を占める高頻度語で、ワシ(「ワシ+ガ(所有格)」の形態を含む)が243語(44%)、オレ(同「オレ+ガ」が121語(22%)で、両者の合計は364語(66%)にも達する。またワシヤ(「ワシハ」の融合形)が22語、オレヤ(同「オレハ」)が1語である。

まず、ワシ、オレの巻ごとの出現傾向であるが、両語共出現する巻（巻1～巻4・巻9～巻20）と出現しない巻（巻6～巻7）は共通するが、その出現頻度は相違が大きい。ワシの方は、巻十一から巻十五（恋歌一、五）に集中し、「恋の部」の合計はワシ全体（243語）の174語（72%）にも達する。因みにこの「恋の部」には他の一人称代名詞も出現するが（注1 206・207頁参照）、ワシを超えるものではなく、「恋の部」はワシ主流の感を強くしている。残り69語は、各巻（巻5秋下、巻6冬歌、巻7賀歌を除く）に、1語から16語までの頻度で分散している。

一方オレの方は、特定の巻への偏りはなく、各巻（巻6冬歌、巻7賀歌、巻8離別を除く）に、1語から17語までの頻度で出現する。このうち比較的頻度が高いのは、巻四（秋歌上16例）、巻十七（雑歌上18例）、巻十九（雑歌上16例）であるが、特に前二者は、「オレ：ワシ」が「16：2」（巻4）、「18：7」（巻17）となっており、ワシを大きく引き離すばかりでなく、他の人称代名詞をも大きく引き離し、オレ優勢の感を強くしている。

周知のように古今集は、全二十巻（歌数1100首+墨滅歌11首）は、部立てや巻によって和歌の内容が性格付けられる構成になっている。例えば、巻一（春歌上）に始まり巻二十（大歌）に至るまで、四季の自然を詠った歌（巻一～巻六）と恋の歌（巻十一～巻十五）を中心として、老齢をたたえ祝う歌を中心の巻七（賀歌）、官人の地方赴任に際しての送別の歌を中心とする巻八（離別歌）、官人の旅中の歌が中心となる巻九（羈旅歌）、物の名称を隠し題として詠み込んだ巻十（物名歌）、人の死を悲しみ悼む巻十六（哀傷歌）、老齢や無常を嘆く歌を中心とする巻十七・十八（雑歌上・下）、短歌、長歌、旋頭歌、誹諧歌などを集めた巻十九（雑歌）、大歌所御歌、神遊びの歌、東歌を集めた巻二十（大歌）などが存在する。

この古今集の構成を考慮すると、ワシとオレの巻による出現傾向の差異は、宣長がこの二語の性格の相違を認識し、訳し分けたためではないか、と推測される。そのことは、さらに言えば、宣長が俗語訳の基底として想定した「京わたりの詞」、すなわち当時の社会（京阪地方）で広く一般に通用していた人称代名詞の性格を反映している、と解することができるのではないかと思う。

そこで巻ごとの出現傾向からさらに進めて、ワシ、オレの訳出上の相違を次の3点から検証していくことにする。なお本稿では、紙幅の関係から1と2を取り上げ、3は次稿に譲る。

- 1 歌人の性差
- 2 和歌の読み手の有無
- 3 文末表現との対応

### 三 歌人の性差

まず歌人の性差を中心にワシ・オレの性格の違いを検討する。性差の判定に当たっては、歌人名、詞書き、相聞歌の形式などを手がかりとした。「よみ人しらず」「作者不詳」でも、性差が判定できる歌は、「女性」「男性」いずれかとし、それ以外は「不詳」として一括した。

なお、古今集は、名のある高貴な歌人の歌から「よみ人しらず」など歌人名が明記されない歌、あるいは短歌、長歌、旋頭歌、誄諸歌、大歌所御歌、神遊びの歌、東歌に至るまで含んでおり、長歌以降は作者が存在しない歌が多い。しかし誄諸歌、東歌でも個人の歌で性差が判明する場合は、観察の対象とした。<sup>注2)</sup> 結果は〔表1-1〕(「女性」)〔表1-2〕(「男性」)〔表1-3〕(「不詳」)となった。(18頁参照)

ワシ(ワシガ)は、「男性」「女性」「不詳」のいずれにも出現するが、頻度は「女性」↓「男性」↓「不詳」の順で、順次高くなり、「不詳」(125語)は「女性」(44語)の3倍弱にも達する。

また巻ごとの出現傾向は、「女性」「男性」「不詳」のいずれも「恋の部」への集中は著しく、「女性」(59%)、「男性」(71%)、「不詳」(78%)と、いずれも6割以上が集中する結果を示している。ただし、「恋の部」といっても巻ごとの頻度は三者三様で、集中する巻とそうでない巻とがある。

オレ(オレガ)は、「女性」には出現せず、専ら「男性」「不詳」のみ出現する。巻ごとでは「男性」「不詳」<sup>注2)</sup>とも、ほぼ万遍無くいずれの巻にも出現するが、特に巻一から巻四、巻十七から巻十九にかけては、両者とも比

〔表1-1〕

女性	春上	春下	夏	秋上	秋下	冬	賀歌	離別	歸旅	物名	恋一	恋二	恋三	恋四	恋五	哀備	雑上	雑下	雑体	大歌	小計	合計
自称	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻14	巻15	巻16	巻17	巻18	巻19	巻20		
ワシ		2	2					4	1				3	3	3			2	1		21	44
ワシガ										1		1	2	10	4			2	3		23	
ワシヤ								3					2	1		1	2		1		10	10
オレ																					0	0
オレガ																					0	
オレヤ																					0	0
合計	0	2	2	0	0	0	0	7	1	1	0	1	7	14	7	1	2	4	5	0	54	54

〔表1-2〕

男性	春上	春下	夏	秋上	秋下	冬	賀歌	離別	歸旅	物名	恋一	恋二	恋三	恋四	恋五	哀備	雑上	雑下	雑体	大歌	小計	合計
自称	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻14	巻15	巻16	巻17	巻18	巻19	巻20		
ワシ	2		1					1		1	12	7	6	12	1	1	2	4	1		50	71
ワシガ										1	2	9	1	1	1	1	2	3			21	
ワシヤ																					0	0
オレ	2	4	5	6	1					1	1	1			5	2	4	1	6		40	54
オレガ				1	1					1		1	1		2	1	4	1	1		14	
オレヤ											1		1								2	2
合計	5	3	6	7	2	0	0	1	0	4	4	22	11	7	20	5	15	8	8	0	126	128

〔表1-3〕

不評	春上	春下	夏	秋上	秋下	冬	賀歌	離別	歸旅	物名	恋一	恋二	恋三	恋四	恋五	哀備	雑上	雑下	雑体	大歌	小計	合計
自称	巻1	巻2	巻3	巻4	巻5	巻6	巻7	巻8	巻9	巻10	巻11	巻12	巻13	巻14	巻15	巻16	巻17	巻18	巻19	巻20		
ワシ	1		1	2					1		16	19	3	10	16		2	2	8	4	76	125
ワシガ									1		20	2	8	5	8		1	1	3		49	
ワシヤ				1							3		2	5							12	12
オレ	2	5	2	5					1	1	3	3		6	1	1	6	3	9	2	50	61
オレガ	1	1	1	4	1														2	1	11	
オレヤ															1						1	1
合計	4	6	5	11	1	0	0	2	1	1	42	15	13	27	26	1	9	8	21	6	199	199

較的傾度が高く、また「男性」では卷十五（恋五）、「不詳」では卷十四（恋四）も傾度が高くなっている。

融合形のワシヤは「女性」「不詳」に、オレヤは「男性」「不詳」に出現する。「不詳」を除くと、ワシヤは「女性」専用、オレヤは「男性」専用の感が強い。

性差からワシ、オレの出現状況を検討した結果、「不詳」を除けば、ワシは「女性」「男性」共有、オレは「男性」専用、ワシヤは「女性」専用、オレヤは「男性」専用の一人称代名詞として機能していることが判明した。

以上のように、歌人の性差に注目することで、ワシ・オレの使用傾向を確認することが出来た。しかしここで気になるのは、「男性」歌人がワシとオレを併用している点である。男性歌人の大半は歌人名が明記してあるため、もしかしたら宣長は歌人名により、つまり歌人の属する身分・階級を手がかりにして、ワシまたはオレを選択したことも考えられる。特定の歌人には特定の一人称代名詞のみを当てる、という結果も予想される。そこでその点を確かめるため、次の2点から検討を加えてみることにする。

#### 1 男性歌人の身分・階級との関連

#### 2 同一歌人の併用の有無

結果は、「表2」から「表4」の通りである。「表2」はワシ・オレ併用歌人、「表3」はワシ専用歌人、「表4」は、オレ専用歌人である。なお、表に挙げてあるのは歌人名明記の男性歌人のみである。ちなみに歌人名不明の男性歌人は3名おり、ワシ（雑下18―1）ワシガ（雑下18―1）オレ（雑上17―1（2））となっている。

〔表2〕ワシ・オレ併用の男性歌人

作者名	ワシ	ワシガ	オレ	オレガ	オレヤ	合計1
凡河内躬恒	夏歌3-1 恋歌12-1 恋歌13-1 恋歌14-1	恋歌12-2	夏歌3-1(3) 秋上4-1 恋歌12-1 恋歌15-1(3) 恋歌15-1			11 (5)
紀貫之	春上1-1 恋歌12-1 恋歌15-1	恋歌12-3 恋歌14-1	春下2-2 物名10-1 *恋歌11-1 哀傷16-1	物名10-1	*恋歌11-1	13 (4)
在原業平	春上1-1 恋歌13-1 恋歌14-1(2) 恋歌15-1(3)			恋歌13-1 恋歌15-1		6 (9)
壬生忠岑	*物名10-1 恋歌12-2 哀傷16-1	*物名10-1	春上1-1 夏歌3-1 恋歌13-1 雑体19-1			8 (9)
清原深養父	恋歌12-1(2) 恋歌13-1	恋歌12-1	*雑体19-1 2	雑下18-1 *雑体19-1		5 (8)
紀友則	恋歌12-1 恋歌13-1 恋歌15-1	恋歌12-1 恋歌15-1	夏歌3-1 恋歌15-1			7 (7)
素性法師	恋歌12-1(2)		春上1-1 春下2-1 秋上4-1 秋下5-1			5 (6)
藤原興風	*恋歌12-1	*恋歌12-1	雑上17-1 雑体19-1(2)	恋歌15-1 雑上17-1		5 (7)
平貞文		恋歌13-1	雑下18-1 雑体19-1		恋歌13-1	4 (4)
大江千里		哀傷16-1	秋上4-1(2)			2 (3)
坂上是則	恋歌12-1		雑上17-1			2 (2)
布留今道	雑下18-1		秋上4-1			2 (2)
合計2	24 (29)	13 (13)	28 (35)	7 (7)	2 (2)	70 (86)

注1 恋歌 12 - 1 (2)

[部立] [巻] [和歌数] [同一和歌内に出現する一人称代名詞の延べ語数]  
なお、( ) のないものは、同一和歌内に1回のみ出現する例である。

注2 \*印は同一の和歌であることを示す。

注3 合計1、合計2は和歌の数、( ) 内の数値は一人称代名詞の延べ語数を示す。  
但し、合計2は和歌数を4首分重複して計算してある。

〔表3〕ワシ専用の男性歌人

〔表4〕オレ専用の男性歌人

作者名	ワシ	ワシガ	作者名	オレ	オレガ
在原元方	恋歌13-2	恋歌11-1	橘長盛		雑上17-1(2)
	恋歌15-1(2)		藤原敏行		秋上4-1 恋歌12-1
宗岳大頼	恋歌12-1	*雑下18-1	藤原関雄		秋下5-1
	雑下18-1(詞)		藤原棟梁		雑上17-1
	*雑下18-1				
源宗子	恋歌15-1(3)		承均法師	春下2-1	
河原左大臣	恋歌14-1	雑上17-1	小野篁	哀傷16-1	
兼芸法師	雑上17-1(2)		藤原惟幹		哀傷16-1
小野貞樹	恋歌15-1	雑下18-1	僧正遍昭	秋上4-1	
平元規	離別8-1		合計	3 3	6 17
橘清樹	恋歌13-1				
下野雄宗	恋歌14-1				
平中興	雑体19-1				
藤原忠行	恋歌14-1				
兼覧王	恋歌15-1				
小野良材		恋歌12-1			
在原行平		雑上17-1			
藤原勝臣		恋歌11-1			
合計	16 (20)	7 (7)			

ワシ・オレ併用歌人が12名、ワシ専用歌人が15名、オレ専用歌人が8名である。これらの歌人を詠歌数を基準に見ると、ワシ専用歌人、オレ専用歌人には、在原元方・藤原敏行・僧正遍昭などを除くと、全体に詠歌数の少ない歌人が多く含まれ、中には1、2首のみ採用という歌人もいる。一方、併用歌人の詠歌数は、紀貫之の102首を筆頭に、凡河内躬恒60首、紀友則46首、壬生忠岑36首、在原業平30首というように、詠歌数の多い歌人が並んでいる。詠歌数が少なければ結果的にワシ・オレいずれか専用という結果となるのは当然で、逆に詠歌数が多く、出現する巻が多ければ結果的にワシ・オレ併用という事になる、ということをも、以上の結果は意味している。

いずれにしても歌人名を手がかりに、ワシ・オレを訳し分ける際に、その歌人の属する身分・階級が一つの基準となるのではないかと予想したが、併用組が存在する以上、歌人名は必ずしもワシ・オレの訳し分けの基準として機能していたとはいえないことが判明した。

ただし、ここで問題にしたいのは、同一の歌人でも相手が存在する場合、その相手の身分・階級が訳し分けの基準として働くこともあり得るのではないかという点である。というのは、拙稿<sup>1</sup>でワシ、ワタクシ、ワタクシ、ワシヤの使用状況を考察した際、伊勢の歌の俗語訳には、この4語がすべて出現し、各々歌の内容、対人関係によって訳し分けられていることが観察された。主人の中宮温子に対しては、ワタクシ、主人（中宮）の弟で、関白の子にはワタクシ、また「恋の部」では恋に身を焼く女心を詠う歌にワシヤ、恋人との仲が絶えた嘆きの歌にはワシヤが、というようである。この点を考慮すると、例えば在原業平の歌の俗語訳に、巻十三ではワシ（646）とオレガ（632）が出現するのは、あるいは伊勢の例と同様に、宣長は歌の内容や対人関係などを参考に訳し分けた結果であるとも考えられる。

そこで次に、対人関係と和歌の内容に注目して検討してみたい。

#### 四 和歌の読み手の有無

一般に具体的な発話の場面で人称代名詞を用いる際、話し手と聞き手の間に成立する対人関係（親疎、年齢、



性差、階級、身分など)、会話の場面(公的、私的、参加人数など)、話題の内容(改まった話題、くだけた話題)などが条件として関わってくる。俗語訳の性格上、具体的発話場面における条件がそのまま適応できるわけではないが、対人関係は訳を施す際に考慮されたであろうことが考えられる。

原歌には、「相聞歌」のように直接の読み手(相手)が存在する和歌もあれば、相聞歌ではないが、読み手(相手)を意識し、あるいは設定、仮想して詠んだ和歌もある。その一方で具体的な読み手が存在せず、自己に向き合い自己の内面を表出した和歌もある。

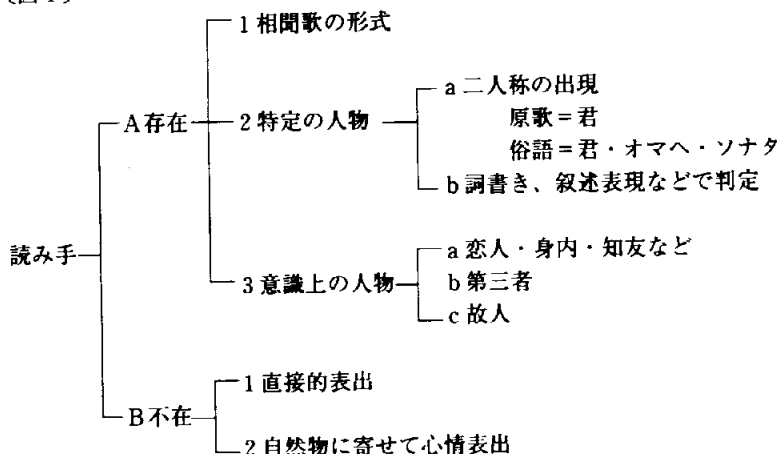
仁田義雄は「日本語のモダリティと人称」で、「(丁寧さ)」といった文法カテゴリの発現には、その発話が、聞き手の存在を必要としている発話なのか、それとも聞き手の存在を必要としない発話なのか、といった聞き手の有無が、重要な要件になっている(196頁)とし、「カテゴリとしての(丁寧さ)」の分化・存在には、基本的にその発話が(聞き手存在発話)であるといったことが、その要件になっている(198頁)と述べている。聞き手が存在することの内包として、次の2点を挙げ、これも(聞き手存在発話)と見なしている。

- 「I」物理的に相手が眼前に聞き手として存在しなくとも、頭の中に想定された聞き手であってもよい。  
 「II」(心内発話)でも聞き手が設定・仮想されることがある。

この仁田説を参考に、本稿では「聞き手」を「読み手」と読み替えて、原歌をA「読み手(聞き手)存在和歌」(以下「A存在」と略す)、「読み手(聞き手)不在和歌」(同「B不在」)に二大別し、ワシ、オレの訳し分けの基準を探ってみることにする。対象とするのは「男性」歌人の、ワシ71語、オレ54語、合計125語である。

まず、考察に当たっては、「図1」に示すように、「A存在」「B不在」をさらに細分類し、詳細に検討することにした。

〔図1〕



「A存在」は、次の3条件に該当するもので、いずれか一つの条件に合っていれば、「A存在」と認定することにした。

- 1 相聞歌の形式を取る。
- 2 原歌、又は俗語訳に作者と関わる特定の人物の存在が確認できる。

a 原歌、又は俗語訳に二人称代名詞(君、オマへ、ソナタ、貴様など)が出現する。

b 詞書き、俗語訳の叙述表現などから、特定の人物に対する返歌であることが確認できる。

- 3 俗語訳に、意識上想定されている人物の存在が確認できる。

a 恋人、知友

b 第三者

c 故人

2は、詞書きから、特定の人物への返歌であることが確認できる歌に、例えば「となりよりとこなつの花をこひにおこせたりければをしみて此歌をよみてつかはしける167」などがある。また俗語訳の叙述表現に、「オウラミ御尤デゴザル1050」「ソノヤウニイヤガラシャルナイ1036」などがあり、明らかに特定の相手を選定していると判断される場合は、2に含めることとした。

3は、現実又は過去に於いて、作者と何らかの関わりを持つ(有

した)人物で、作者の恋慕、懸想、相愛、失恋、片思い、友情、信頼、追憶、皮肉などの対象として存在すると判断される人物である。言語形式としては、次のようなものが観察される。

3 aは、「アノ人、カノ人、ソノ人、思フ人、ツレナイ人、人」などと現れ、特定の人物として頭の中で意識していることが確認できるものである。ただし、「人」は世間一般を表すこともあるので、俗語訳の文脈により該当するか否か判断する。

3 bは「コレ世間の衆、女中タチ、橋守ヨ」などと現れる。これらの人物は作者と直接的な対人関係を持たないが、呼びかけの形式で出現するため、意識上存在する特定の人物と見なすことにし、3 bとして立てることとした。

3 cは、過去に関わりを有した身内、友人などで、追憶の中に登場する故人である。これも意識上存在する特定人物と見なすことにした。

次に「B不在」は、「A存在」に該当しない歌全てを含み、作者が自己の内面に向かい、自己の心情を表出した歌を対象とする。ここには懸想の辛さ、失恋の痛手、老いの嘆き、季節の変化に揺らぐ心を詠ったものなどが含まれる。言語形式上の特徴をもとに、次の2種に分類した。

B 1 直接的な心情の表出

B 2 自然物に仮託して心情の表出

B 1は、心情・感想などを、自然物などに仮託せず、直接的に表出しているもので、俗語訳に「オレハ春デハアルマイトサ思ウ」「オレハイロイロト物ガサ悲シイワイ」などと現れる。

B 2は、自然物へ呼びかけたり、自然物を引き合いに出したりして、自己の心情を自然物に託けて表出し、あるいは自然物を擬人化し、洒落、言葉遊びなどを通して自己の心情を表出するものである。詳細に観察すると、

次の3種の表現上の特徴が認められる。なお(1)(2)は共存することが多い。

(1) 「櫻ヨ」「時鳥ヨ」「鶯ガ：ソチハ」など、櫻や時鳥、鶯などに呼びかける形式が現れ、それを契機に自己の心情を表出する。

(2) 「ト同ジヤウニ」「ガ(ノ)ヤウニ」「スルヤウニ」「デモナイニ(ガ)」「バカリデハナイ」などの言語形式を用いて、自己の心情を自然物に託けて表出する。

「時鳥ハ：世ノ中ガウイト云テ：オレト同シヤウニ鳴テクラスコトヤラ164」

「郭公モオレガヤウニ物ガカナシイカイ578」

「松コソ：久シウアル物ナレ オレハソノ松デモナイニサ397」

「夏虫バカリデハナイ オレモ其通りニ心カラ思ヒニ身ヲシモテ(？モヤシテ)ノケルデアラウ600」

(3) 女郎花を女性に、燕子を女兒に見立てるなど、擬人法的表現を取る。

「アノ女郎花ヲバア、イタツラナ女ヂヤト思フテ227」

「見事ニ咲テアルアノ燕子ト云兒ヲ母親ヤ乳母ナドモ打ソロウテトモドモニテウアイスルヤウニ244」

以上の分類基準をもとに、ワシ・オレを分類、整理すると、(表5-1)(表5-2)の結果となった。

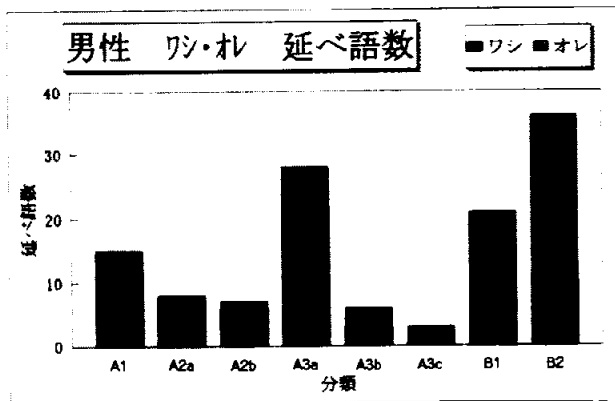
〔表5-1〕〔表5-2〕を見ると、ワシは「A存在」に、「オレ」は「B不在」に集中する傾向が確認できる。

特にA1、A2aは専らワシのみで、オレは一例も出現しないが、逆にB1は専らオレのみで、ワシの例はない。またA2b、A3aはワシを主に一部オレを含み、B2はオレを主に一部ワシを含む結果となっている。それに対し、A3b、A3cは、少数例だが、ワシ・オレが拮抗している。

以下、各項目ごとに検討していく。

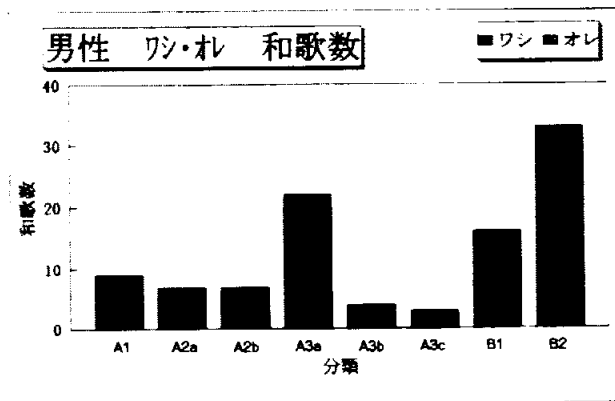
〔表5-1〕

延べ	A 1	A 2 a	A 2 b	A 3 a	A 3 b	A 3 c	B 1	B 2	合計
ワシ	16	9	6	25	3	1	0	11	71
オレ	0	0	1	3	3	2	21	24	54



〔表5-2〕

首	A 1	A 2 a	A 2 b	A 3 a	A 3 b	A 3 c	B 1	B 2	合計
ワシ	9	7	6	20	2	1	0	11	56
オレ	0	0	1	2	2	2	16	22	45



四—1 「A存在」のワシ・オレ

1 A 1

A 1は、相聞歌の形式を取るものであるが、ここにはワシが9首16例で、オレは一例も出現しない。ワシが出現するのは、女性又は男性からの贈答歌に対する「返し」の歌の俗語訳である。

原歌9首の内、二人称「君」が現れない歌は8首あるが、俗語訳では1首を除き、全てに二人称代名詞「貴様、ソナタ、オマヘ」が出現する。

二人称を使用する相手の人物（↓印の後の人物）は、次のようになっている。

貴様 : 在原業平↓よみ人しらず（旧知の間柄）63 壬生忠岑↓在原滋春425

宗岳大頼↓作者不詳（凡河内躬恒か）979

ソナタ : 橘清樹↓あひしれりける女655 小野貞樹↓小野小町783

在原業平↓紀有常娘785

オマヘ : 在原業平↓ある女707

作者不詳↓女974

「貴様」は、主として男性に（「旧知」の間柄の人物は性差不明）、「ソナタ、オマヘ」は女性に使用している。

なお二人称が出現しない1首は、在原業平が「齋宮なりける人」へ贈った返歌（646）で、「よみ人しらず」と記される女性である。ちなみにこの「齋宮なりける人」の和歌（645）の俗語訳には、「オマヘガワシガ方へ：ワシガオマヘノ方へ」とあり、「齋宮なりける人」の一人称代名詞はワシ、相手の在原業平はオマヘとなっている。

以上、相手の存在が明確に確認できる相聞歌において、ワシのみが出現することは、男性歌人のワシが、「A存在」と密接に関わることが確認される。

2 A 2

A 2は、「原歌、又は俗語訳に作者と関わる特定の人物の存在が確認できる」もので、a「原歌、又は俗語訳

に二人称代名詞が出現する」、b「詞書き、俗語訳の叙述表現などから、特定の人物に対する返歌であることが確認できる」、以上の2種を含む。

A 2 aにはワシのみが7首9例出現し、A 2 bには、ワシが6首6例、オレが1首1例出現する。

## 2-1 A 2 a

A 2 aの原歌7首中、二人称の「君」は4首にしか出現しないが、俗語訳には7首とも全て二人称の「貴様、君、オマエ」が出現する。

二人称を使用する相手の人物(↓印の後の人物)は、次のようになってい

貴様 : 平元規↓旅立つ恋人<sup>386</sup>

君 : 清原深養父↓ツレナイ人<sup>603</sup> 藤原興風↓恋人<sup>567</sup> 紀貫之↓恋人<sup>572</sup>

オマへ : 凡河内躬恒↓恋人<sup>608</sup> 藤原忠行↓恋人<sup>680</sup> 河原左大臣↓恋人<sup>724</sup>

男性のワシに対し、ツレナイ人を含め恋する相手の女性は、必ず二人称の「貴様、君、オマへ」が当てられている。相聞歌と同様、ワシは「A存在」と密接に関係することが確認される。

## 2-2 A 2 b

A 2 bは、ワシが6首6例、オレが1首1例である。まず詞書きから判断する例は、ワシの4首4例である。

## (1) ワシ

①はつせにまうづるごとに：かの家のあるじ：といひ出して侍りければ(紀貫之↓宿の主) 42

②となりよりとこなつの花を：をしまて此歌をよみてつかはしける(凡河内躬恒↓隣人) 167

③やまひにわづらひ：よみて人のもとにつかはしける(大江千里↓人) 859

④人をとほで久しう有けるをりにあひうらみければよめる（作者不詳↓人⇨女性） 977

42は、宿の主の愚痴に対して、紀貫之が梅の花に託して意中を伝えたもので、俗語訳には「人ハドウヂヤヤラ心モカハラヌカカハツタカシラヌガ」とある。167は、凡河内躬恒が隣家から常夏の花（なでしこ）を所望されたのを、巧みに断った歌である。859は、大江千里が病気が直りそうもないと思われたので辞世の歌として一人のものにつかはしける」歌で、「マダハカナイ物ハ、ワシガ命デゴザルワイ」とある。977は、長い間の無沙汰に恨み言を言われ、それに対し弁解した歌で、詞書きと同様、叙述表現にも「オウラミ御尤デゴザル：拙者モナニカト：ワシガ心ハ」とある。ここでは「拙者、ワシガ」が共存している。

ちなみに、859の次に配列してある藤原惟幹の歌（860）は、「身まかりなむとてよめる」と詞書きにあり、辞世の歌であるが、詞書きには特定の人物に送った歌とは記されていない。従って俗語訳は「オレガ身モ 露ノヤウニ：今消ウモシレ子バ」とあって、オレとなつてゐる。同じ辞世の歌でも、大江千里の場合は「人のもとにつかはしける」とあるためワシが、藤原惟幹は特定の人物を想定してゐないためオレが当てられている。詞書きから窺ひ知る特定の人物の存在の有無が訳し分けに関わつてゐる例から判断すると、ワシは「A存在」、オレは「B不在」という図式が成り立つのではないかと思ふ。

次に、叙述表現から判断される例は、ワシの2首2例、オレの1首1例である。

(1) ワシ

①イク度カイク度カ逢ハウト約束シテ：ワシガ心底の深イ所ヲ推量シテクレカシ

（凡河内躬恒↓女性） 614

②何ゾ気ニイラヌコトガアツテ ワシニ逢フコトヲ止ウト思フナラ：ヤメルナラ止メタガヨイ

（平中興↓女性） 1050

(2) オレ



① 随分忍ンデオレガ来ルバカリヲバ ソノヤウニイヤガラシヤルナイ

(壬生忠岑↓女性) 10 36

614 は、騙されたとは知りつつ、諦めきれない思いを「推量シテクレカシ」と、相手に知って欲しいと訴えていることが叙述表現に現れている。10 50 は、こちらの本心を見極めてから、「逢フ事ヲ止ウト思フナラ：止メタガヨイ」と、相手に向かって自分の意志を伝えていることが叙述表現に現れている。ここには「ワシニ逢フ事」「コチノ心」が共存している。

一方、オレが出現する 10 36 は、共寝しなければ浮き名は立たないのだからと言って、「随分忍ンデオレガ来ルバカリヲバ ソノヤウニイヤガラシヤルナイ」と共寝を要求している歌である。

叙述表現から判断される相手の女性は、いずれも作者を嫌い、疎遠な関係になった対象であることが分かる。そういう相手に対し、ワシの場合、自分の思いを「推量シテクレカシ 614」「オウラミ御尤デゴザル 977」「止ウト思フナラ：止メタガヨイ 10 50」などと表し、俗語訳は依頼、弁解、提案などの形を取っている。それに対しオレの方は、「イヤガラシヤルナイ 10 36」と、強引に相手に要求する形を取っている。この訳出上の差違を考慮すると、特定の相手が存在する場合でも、相手に強引な態度をとる場合には、ワシではなくオレを選択したことが考えられる。

### 3 A 3

A 3 は、「俗語訳に、意識上想定されている人物の存在が確認できる」もので、a 恋人・知友、b 第三者、c 故人、の 3 種を含めて考える

A 3 a は、ワシが優勢だが、A 3 b、A 3 c はワシ・オレがほぼ同数である。

## 3-1 A3a

A3aは、ワシが20首25例、オレが2首3例である。意識の対象となるのは、恋人が多く、俗語訳には「アノ人、カノ人、ソノ人、思フ人、ツレナイ人、人」などの形式が現れる。以下、ワシ・オレの例を挙げる。

## (1)ワシ

## 卷十一(恋歌一)

①ワシガ思ヒノ：思フ心ヲソノ人ニツケルノチャワイ(在原元方) 480

## 卷十二(恋歌二)

②ワシガ思フ人ハツレナイ人ナレドサ(素性法師) 555

③ワシガ恋ハ：サウイウコトヲ知テクレル人ガナイ(小野良材) 560

④ワシガ又此ヤウニ人ニアヒタイアヒタイト思フテ恋ニ身ヲシマウノハ(紀友則) 561

⑤ワシハ人ニハ云ハズニ此ゴロハホンニ消入ルヤウニ物思ヒヲマアスルコトカナ(壬生忠岑) 566

⑥人ヲ思フ心ハ雁デハナケレドモ：ワシガ心ハウカウカトウハノソラニナツテ(清原深養父) 585

⑦ワシガ恋ヲ思フ人ハカウトハ知ウカイ(紀貫之) 604

⑧ワシガ恋ハ：心ハジヤウヂウ思フ人ノ所へ通ウテ恋シイモノヲ(紀友則) 607

## 卷十三(恋歌三)

⑨逢事モナイ人ノ所へイクワシナレバ：ソノ人ヲ恨ンデバツカリサカヘルワイ(在原元方) 626

⑩人ハドウアルカ ワシハナイコトヲ云ヒタテラレル名ガ惜ケレバ(在原元方) 630

⑪ワシガ通ウト云コトヲ人ニシラスデハナイゾ(凡河内躬恒) 662

⑫モウワシモイツソウチダシテ ミダレウ ソシタラ人ノ目ニカカルデアラウガ(紀友則) 667

## 卷十四(恋歌四)

- ⑬ ワシガ思フ人モ 今コソアレ 後ニハカレテ遠ノイテシマウデアラウニ (凡河内躬恒) 686
- ⑭ ワシハ恋ニヤセホソツテ心ハジヤウチウ思フ人ノ身ヲハナレハセヌ (下野雄宗) 728
- ⑮ ワシガ心ガカノ人ニシミコンダカラハ イツマデモカハラウトハ思ハレヌ (紀貫之) 729
- 卷十四 (恋歌四)

- ⑯ 人ハワシヲトホウヨソニサ思フヤウスニオモハルル (在原元方) 751
- ⑰ コヌ人ヲクルカクルカト待テ居ル間ガ久シウナツタレバワシハ毎日ナカヌ (兼覽王) 779
- ⑱ ワシガ思フ人ノ腹ノ内ナ心ガヨソヘウツツタハドウ云コトヤラ (紀友則) 787
- ⑲ 人ノワシヲ忘レタワスレ草モワシヲワスレタツレナイ人ノ心ヘ霜ガオケバ (源宗干) 801
- 卷十八 (雑歌下)
- ⑳ モシ京ノ人ガ ワシガコトヲ ドウヂヤヤラト尋子タナラ (小野貞樹) 937

(2) オレ

- 卷十一 (恋歌一)
- ① アノ人ヲオレヤトウカラサ思ヒソメタ 又オレガアノ人ヲ思ウノハ吉野 川の早瀬のヤウニヤルセモナウ  
思ウ (貫之) 471
- 卷十九 (雑体)
- ② 今オレガ思フ人ガ オレヲ思フテクレヌムクイト云コトハナイコトカイ キットアルコトチャワイノ  
(清原深養父) 1042

ワシの場合、意識の対象となる人物は「思フ人、ソノ人、ツレナイ人、コヌ人、カノ人」などと現れ、作者の意識が直接的に向かう相手と想定されている。それに対しオレの2例は「アノ人、思フ人」と現れる。まず「ア

ノ人」の「アノ」は、「ア」系の觀念指示を表す代名詞であり、それは「話し手が一方的に自己が強い関心を寄せているものを指す語」(「日本語の指示詞」<sup>[注3]</sup> 83頁)と説明される。この点から解すれば、オレと関わる「アノ人」は懂れの域に止まる対象で、未だ作者と直接的関わりのない人物となる。また1042のオレは、「ムクイト云コトハナイコトカイ キットアルコトチャワイノ」と、以前自分を思ってくれた人を思わなかつた因果が巡って、今思う人が思ってくれないと、自分の恋を因果応報と捉えている歌の俗語訳に出現するものである。ここでの作者の意識は「思フ人」そのものに向かうより、因果応報と捉え自問自答している方にあると言えよう。この2例とも後述のB1に近いものがある。

3-2 A3b

A3bは、「コレ世間の衆、女中タチ、橋守ヨ」などの形式が現れ、作者と直接人間関係をもたない、世間一般の人物に呼びかける形式を取る例で、ワシ・オレとも同数の2首3例である。

(1)ワシ

卷十七 (雑歌上)

①「女共の見てわらひければよめる」(兼藝法師) 875

女中タチメツタニワシヲ笑ハシャルガ：朽木ノヤウナレワシモ ……心ハ花ニモナラウワサ

卷十八 (雑歌下)

②コレ世間ノ衆 知テ居ラルルデモアラウガ：今ワシガ云テキカスヲ 聞テナリトモ 此世ヲバ早ウステサツ

シャル：(布留今道) 946

(2)オレ

卷十三（恋歌三）

①オレガ通ヒミチノ関所ノ番ハ：チヨットナリトネムツテクレカシ（在原業平） 632

卷十七（雑歌上）

②宇治ノ橋守ヨ：其方ヲサ オレハフビンニ思フ オレト同シヤウ二年ヘタ 老人チャト思ヘバサ（よみ人しらず） 904

ワシが出現する875は、身なりは「朽木ノヤウナ」ワシではあるが、「心ハ花ニモナラウワサ」と、気持ちの持ち方次第で色香の存することを述べたもの、946は、仏教の厭離穢土の思想を述べたものである。

オレが出現する632は、秘密の通路に番人が置かれたため女性に逢えないでいる、だから番人よ、毎晩ぐっすり眠って欲しいと詠んだもの、904は「宇治ノ橋守ヨ」と呼びかけ、自分と同じように年経た老人だと思えば、「其方ヲサ：フビンニ思フ」と詠んだものである。

ワシが出現する前二者は、相手に向かい自己の見解・立場を表明しようとする積極的意図が汲み取れるのに対し、オレの方は内なる願望、同病相哀れむ的な老いの悲哀が滲み出て、自己の内面に向かう姿勢が強く感じられる。第三者を意識する場合、外向的姿勢にはワシが、内向的姿勢にはオレが、各々訳し分けられていると解される。

3-3 A3c

A3cは、ワシが1首1例、オレが2首2例である。

(1)ワシ

卷十六（哀傷）

①「ちちが思ひにてよめる」ワシガ今服デ着テ居ルキモノノ（壬生忠岑） 841

(2) オレ

卷十六（哀傷）

①「いもうとの身まかりける時よみける」此オレガ泣ク涙ガ（小野篁） 829

卷十六（哀傷）

②「紀ノ友則が身まかりける時よめる」オレハカウシテ残ツテ居レバ（紀貫之） 838

いずれも身内の喪中の時の歌であるが、父を悼む歌ではワシ、妹、従兄弟を悼む歌ではオレが出現する。ワシは目上、オレは同等、目下に対する一人称代名詞として訳し分けたようである。

四—2 「B不在」のワシ・オレ

1 B1

B1は、俗語訳に「オレハ春デハアルマイトサ思ウ」「オレハイロイロト物ガサ悲シイワイ」など、自己の見解、心情などを直接的に表現する形式を取るものである。オレが16首21例で、ワシの例はない。以下例を挙げ  
る。(一)内は歌の概要である。

(1) オレ

卷一（春歌上）

①ナンデモ鶯ノナカヌウチハイツマデモ オレハ春デハアルマイトサ思ウ（壬生忠岑） 11

②オレハアハウナ：梅ノ花ノドウモイヘ又色ヤ香ハ 折テカウ近ウ見テノコトチャワイノ

(素性法師) 37 (梅の色香を愛でる心)

③誰か知テ居ルゾ オレニ教ヘテクレイ ソコへ行テゾンブシニ恨ミヨイハウ (素性法師) 76

(花散らす風への恨み言)

卷四秋歌上

④月ヲ見レバオレハイロイロト物ガサ悲シイワイ オレヒトリノ秋デハナケレド (大江千里) 193

(月を見て感じる孤独の悲しみ)

卷五秋歌下

⑤オレハ仙人ノスミカヘイクトテ 山道ノ菊ノ花ノ中ヲ分テイテ其菊ノ露ニ (素性法師) 273

(仙境と現実世界の時間の懸隔)

卷十物名

⑥オレハ花ト云物ヲ今朝始メテサ見タガ：アダナ物ト云ベキ色デヤワイノ (紀貫之) 436

(薔薇の花の色の艶やかさ)

卷十三恋歌三

⑦オレハ夜ガアケレバカヘラネバナラヌコトトテ：曉ホドウイツライモノハナイヤウニ思フ

(壬生忠岑) 625 (恋愛中の曉の辛さ)

卷十五恋歌五

⑧タダオレガ身一ツバツカリハ 去年ノママノ身デアリナガラ 去年逢タ人ニ (在原業平) 747

(去年の人に逢えない辛さ)

⑨サテサテウイコトヤ オレハコレホド人ヲ深ウ思フニ：オレガ思ウトホリニオレヲ思フテクレル人ガアレカ

シ (凡河内躬恒) 750 (自分の恋の叶わぬ辛さ)

⑩オレハマヘカタ云テオイタコトハイツマデモワスレマイト思ウ (凡河内躬恒) 794

(反故にされた約束への思い)

⑪ 思フ人ハモハヤ絶テ：鏡ヘウツルオレガ影デナウテハ 外ニ相手ニシテ云ハウヤウハナイ

(藤原興風) 814 (裏切りによる怨み、歎き)

卷十七雑歌上

⑫ オレモ昔ハイツカドノ男デ 繁昌ニクラシタ時節モアツテキタモノヲ ア、クチヲシイコトヂヤ(作者不詳)

889 (老人の述懐)

⑬ オレガ物デハナケレド ヌシガナケレバ オレガ心デ タナバタニ借シテ進ゼウカイ

(橘長盛) 927 (布を七夕に供える趣向)

⑭ オレハ秋ガツライニヨツテ：ヒタヒタト涙ヲ流シテ泣テサクラスワイ(坂上是則) 932

(秋のつらさ)

卷十八雑歌下

⑮ オレハ門ヲサシテ出入セヌヤウニモ見セヌニ ナゼニ我身ノタメニハ ウイ世ノ中デ

(平貞文) 964 (官職の罷免)

卷十九雑体

⑯ 恋ラスレバ名ガタツトシリナガラ迷フノハ オレヒトリカ オレバカリヂヤナイ

(藤原興風) 1053 (浮き名の立つことを内心恐れる心境)

オレが出現するのは、第一は、季節の変化や自然の景物に接して、自己の見解、感興、実感などを表明する歌の俗語訳に、第二は、人生の悲哀、苦悩、煩悶などの滲み出る歌の俗語訳に、各々出現していることが確認されるが、前者より後者の方が絶対数が多い。

第一は、「春歌上」「秋歌下」「物名」などに見られる。春の使者鶯を待つ心で「オレハ春デハアルマイトサ思



ウ11」と自説を主張したり、花散らす風の居所が判るなら「ソコへ行テゾンブンニ恨ミライハウ76」と、風の行為を恨む発言をしたり、仙人の住処へ行くという趣向で「山道ノ菊ノ花ノ中ヲ分テイテ23」一千年もたったと時間の懸隔を詠つたり、梅の色香や薔薇を愛でる心で「梅ノ花ノドウモイヘヌ色ヤ香リハ：近ウ見テノコトヂヤワイノ37」「アダナ物ト云ベキ色ヂヤワイノ136」などと感想を述べたり、「オレガ心テタナバタニ借（ママ）シテ進ゼウカイ22」など、七夕に布を供える趣向を詠つたものなどである。

オレと叙述表現との対応関係を見ると、「オレハ：思ウ」「オレハアハウナ」（オレハ）：恨ミライハウ」「オレハ：イクトテ」「オレハ：見タガ」「オレガ心デ：進ゼウカイ」など、いずれも自己の見解を主張、立場表明を行うなど、主体的な態度で事に臨む姿勢が読み取れる。

第二の、煩悶、孤独、憂愁、辛苦、愁傷、失意、怖じ気など、失意逆境にある作者の心情を表出している歌には、次のものがある。

まず「恋歌」には、恋愛中の場合「オレハ：ヨニ曉ホドウイツライモノハナイヤウニ思フ625」などと、後朝の惜別を曉の辛さとして心境を吐露する歌などがあるが、大半は次のようなものである。例えば「去年逢タ人ニアハレイデ：去年ノ春ガサ恋シイ74」と、最早いらない去年の女性に対する追慕の情、「オレガ思ウトホリニオレヲ思フテクレル人ガアレカシ750」と、受け入れられない恋の辛さ、「オレハマヘカタ云テオイタコトハイツマデモワスレマイト思ウ794」と、約束を反故にされた悔しさ、「ウランデモ泣イテモ此カナシサバ誰ヲ相手ニシテイハウゾ814」と、痛恨の極みにある者の嘆きなど、恋愛の段階は終わり、その後を訪れる哀感、憂悶、悲歎などが中心になっている。

「恋歌」以外では、「オレヒトリノ秋デハナケレド193」と、秋の季節のもたらす孤独の哀しみ、「昔ハイツカドノ男デ 繁昌ニクラシタ時節モアツ889」たのに、今は老いて貧乏であると、老いを嘆く歌、「秋ガツライニヨツテ：ヒタヒタト涙ヲ流シテ泣テサクラスワイ932」と、秋の辛さを詠うもの、「ナゼニ我身ノタメニハ ウイ世ノ中デ、得世ニ出ヌコトゾイ964」と、罷免による失意を詠うもの、「迷フノハ ……オレバカリヂヤナイ皆サウヂヤ

1053」と、浮き名に怯える内心の恐れを表出したものなどである。

オレと対応する叙述表現を見ると、「オレハ：悲シイワイ」「(オレハ)：ウイツライモノハナイヤウニ思フ」「オレハ：深ウ思フニ 人ハ：思フテクレヌ」「(オレハ)：クチオシイコトチャ」「オレモ：衰ヘテユクガ」「オレハ：ツライニヨツテ」「オレハ：我身ノタメニハウイ世ノ中デ」など、「ツライ、悲シイ、ウイ、クチオシイ」など、失意の境地にある者の心情表現が目につく。

以上、B1に相当するオレは、第一に、自然の景物などに接した時の自己の見解を主張する俗語訳に、第二に、主として失意・逆境にある歌人の心情を表出する俗語訳に、出現していることが確認される。

2 B2

B2は、「自然物に仮託して心情の表出」をするもので、形式的には次の3種が認められる。

(1) 「櫻ヨ」「時鳥ヨ」「鶯ガ：ソチハ」など、櫻や時鳥、鶯などと呼びかける形式が現れ、それを契機に自己の心情を表出する。

(2) 「ト同ジヤウニ」「ガ(ノ)ヤウニ」「スルヤウニ」「デモナイニ(ガ)」「バカリデハナイ」などの言語形式を用いて、自己の心情を自然物に託けて表出する。

(3) 女郎花を女性に、撫子を女兒に見立てるなど、擬人法的表現を取る。

ここでは、ワシが11首11例、オレが22首24例あり、オレの方が優勢である。

(1) ワシ

卷十一恋歌一

①ワシガ恋ハソンナ風ノヤウナタヨリニセウ物サヘナイワイノ (藤原勝臣) 472

## 卷十二恋歌二

② ワシガシゲウ思ウ恋ノ数ニクラベタナラマサリハスマイ(坂上是則) 390

③ ワシハ ウハツラノ氷ツテアル冬ノ川ヂヤヤラシテ：心ノ内デ：恋シウ思フテタテル

(宗岳大頼) 391

④ 浮草ノ：ウイテアルヤウニ ワシハウイタ恋ヲマアスルコトカナ(壬生忠岑) 392

⑤ シラヌ山道コソマヨウモノナレ ワシガ恋ハシラヌ山道デモナイニ(紀貫之) 397

⑥ ワシガ恋ハ タトヘテイハバ道ライクニ ドコヘイクコトヤラサキモシレス(凡河内躬恒) 611

## 卷十三恋歌三

⑦ 昼ノ間ガ逢ヒガタサニ夜ルヲサワシハ待ツワイ(清原深養父) 665

⑧ ワシガ恋ヲバ 枕ハトウカラモ知テキタコトモアラウガ 枕ヨリ外ニハ(平貞文) 670

## 卷十五恋歌五

⑨ 人ノ心ノ秋ガウイユエニ ワシハ空ヲワタル初雁ノヤウニ泣テサタテルワイ(紀貫之) 804

⑩ ワシガヤウナウイ身ハイツソノコト水ニウキナガラ消ル沫ノヤウニキエテ(紀友則) 827

## 卷十七雑上

⑪ 此瀧ヲ見レバ：ソシテワシガ身ノウヘノカヤウニウイ此節ノ涙ニセウト存ズル(在原行平) 922

少数だが、B1の失意の境地と関わるオレに通じる例、804、827、922がある。それらは「人ノ心ノ秋ガウイユエニ」「ワシガヤウナウイ身ハ」「ワシガ身ノウヘノカヤウニウイ此節ノ」と「ウイ」が現れ、思うようにならない苦しい心境を表出する際にワシが当てられている。しかしこの3首を除くと、あとは「恋」と共存することが多く、「ワシガ恋ハ」「ワシガシゲウ思ウ恋ノ数」「ワシハウイタ恋ヲ」など、恋情を客観的に捉えているような文脈に出現する。

(2) オレ  
卷二春歌下

①ドレヤ櫻ヨ オレモイツシヨニ散テドウナリトモナツテシマハウ (承均法師) 77

(散る桜の潔さと老醜)

②残念ナガラオレハヨソニ見イ見イ来タニ 風ハアノ櫻ヲ心マカセニスル (紀貫之) 87

(桜を散らす風)

卷三夏歌

③時鳥ガ鳴テイクガ：オレモ此ヤウデハドチヘナリトモイキタイ (紀友則) 153

(深夜鳴き行く時鳥と遠くへの思い)

④時鳥ヨ ソチモオレト同シヤウニ 昔ガ今デモ恋シイカ (壬生忠岑) 163 (時鳥と懐旧の情)

⑤世ノ中ヲウイ物ニ思フテ泣テクラスモノハオレヂヤガ 時鳥ハオレデハナシニ (凡河内躬恒) 164

(泣き暮らす時鳥と憂い世の中)

卷四秋歌上

⑥アノヤウニナク虫ハ オレガヤウニアレモ物ガ悲シイカシラヌ (藤原敏行) 197

(鳴く虫と秋の夜長の物悲しさ)

⑦213オレハ秋ノ夜ノウイコトノ数々ヲオモヒツツケテ：泣テサアカスワイ

(凡河内躬恒) 213 (鳴き渡る雁と憂い秋の夜)

⑧女郎花ト云名ガヨサニ：カナラズオレガ女ニオチタト人ニ云デハナイゾヨ (僧正遍昭) 226

(女郎花を女性に見立てての洒落)

⑨アノ女郎花ヲバア、イタヅラナ女ヂャト思フテ オレハヨソニ見テサ通り過テイク

(布留今道) 227 (女郎花を女性に見立てての言葉の文)

⑩アノ撫子ト云児ヲ：オレバツカリガア、ヨイ児ヤト云テ独リ見ハヤサウコトカヤ (素性法師) 244  
(撫子の可憐さを児に見立てて愛でるさま)

卷五秋歌下

⑪ア、クチヲシイオレガ身ノウヘモテウド此紅葉ト同シコトヂヤ (藤原關雄) 282  
(奥山の日の光を見ずに散る紅葉と山居の身の口惜しさ)

卷十物名

⑫オレガ黒イ髪ガ色ガカハツテ シラガニナツタカシラヌ (紀貫之) 460  
(つむりへ雪が降るといふ老境に進む感慨)

卷十二恋歌二

⑬郭公モオレガヤウニ物ガカナシイカイ：ナゼナクヤラ (藤原敏行) 578  
(夜鳴く郭公と物悲しさ)

⑭夏虫バカリデハナイ オレモ其通りニ心カラ思ヒニ身ヲシモテノケルデアロウ (凡河内躬恒) 600  
(火に焼け死ぬ夏虫と恋いこがれ)

卷十五恋歌五

⑮オレハソノヤウナモノヂヤヤラ 人ニイトヒキラハレテバツカリ一生ヲタテル (紀友則) 753  
(いと晴れと愛する人から厭われる我と)

卷十六哀傷歌

⑯オレガ身モ 露ノヤウニ：今消ウモシレ子バ 露トナンニモカハルコトハナイニ (藤原惟幹) 860  
(露にも比すべきはかない身)

卷十七雑歌上

⑰ オレモ此ヤウニダンダン年ガヨツテ衰ヘテユクガ 昔男ザカリノ時節ハ (作者不詳) 891  
 (雪の重みで傾く篠の葉と衰えゆく身)

⑱ 902 オレガ頭ハ：雪ノイクヘモイクヘモツモツタヤウニマツ白ニナツテ (在原棟梁) 902  
 (雪のように白くなった頭と老境の感慨)

⑲ オレハ此ヤウニ二年バツカリヨツテ：オレハソノ松デモナイニサ (作者不詳) 908  
 (高砂の尾上の松ならぬ凡庸な身)

⑳ オレハ此ヤウニキツウ年ガヨツテ：松ヨリ外ニオレガクラ井年ヘタ物ハトントナイ  
 (藤原興風) 909 (松より他に友もない老境の感慨)

㉑ オレガヤウニ本カラ花モサカヌ身ハ 人ノ今度ノヤウナ歎キモナケレバ (清原深養父) 967  
 卷十九雑体

㉒ オレハ女ヲ思フ思ヒガシゲウテ ホロホロトサ泣キマス (平貞文) 1033  
 (妻を恋う雉のように女を思つて鳴く)

ここには、女郎花を女性に(226・227)、撫子を可憐な児に(244)見立てるなど、洒落や言葉の文による歌の俗語訳に出現する例もあるが、全体的に見ると、B1と同様、人生の悲哀、苦惱、煩悶など、思う通りにいかない世の中を嘆き悲しむ歌の俗語訳に出現する例が大半を占めている。

例えば、老醜を人目に曝したくないので、深く散る櫻花に「ドレヤ櫻ヨ、オレモイツシヨニ散テドウナリトモナツテシマハウ77」と老いの心境を詠うもの、「時鳥ヨ ソチモオレト同シヤウニ 昔ガ今テモ恋シイカ163」と、在所で鳴く時鳥に懐旧の情を詠うもの、「ナク虫ハ オレガヤウニアレモ物ガ悲シイカシラヌ197」と、虫の音と同様、秋の夜長を泣き明かしたのであろう作者の歎き、秋の夜の憂いことを思つて泣く悲しみを「雁ノイクツモツ

ラナツテ鳴キワタルヤウニ213」と感情を移入した歌、「奥山ノ紅葉ハ日ノ光ヲ見ル時モナシニ散テシマウデアアラウト思ハレルガ22」口惜しいことに我が身も同様と、山里に籠もる身の不遇を歎いた歌、鏡に映る影を「ツムリハマツ白ニ雪ガフツタ46」と、老境に進む感慨を詠うもの、火中に身を投じる夏虫を「ハカナイオロカナコトヂヤト60」云った自分も、同様なことをしようとしていると、恋い焦がれる身の愚かさを詠ったもの、「甚晴ト（イトハレ）被厭ト（イトハレ）詞ガ同シコトヂヤニヨツテサ」と、掛詞によつて「人ニイトヒキラハレテバツカリ一生ヲタテル73」と、愛する人から厭われる身の不幸を悲嘆する歌、我が身を憐い「露トナンニモカハルコトハナイニ86」と喩えたもの、「モウ松ヨリ外ニオレガクラ井年ヘタ物ハトントナイ99」と老境に入つて初めて知る真意を詠ったもの、妻を恋ひ慕つて泣く雉のように、「女ヲ思フ思ヒガシゲウテホロホロト泣キマス1033」という情愛の深さ故の歎きなどである。

櫻花、時鳥、夏虫、露、紅葉、雁、雪、雉などに己の心情を重ね合わせ、人生の悲哀、身の不遇、愚かさなどを詠い上げている和歌の俗語訳に、オレが出現することが確認される。

以上、形式面からB1「直接的な心情の表出」、B2「自然物に仮託して心情表出」と、二つに分けて考察した。B1には専らオレのみが、またB2にはワシとオレが出現する。オレの場合は、B1、B2とも己の心情を自然物に仮託して詠うか否かという差違だけで、両者とも相手を意識するのではなく、自然物を賞翫したり、思うに任せぬ不条理な世界を歎き悲しんだりする歌の俗語訳に採用された点では共通している。

なおB2に出現するワシは、一部、B2のオレと共通する面があるが、大半は恋情を客観的に詠う歌に出現しており、相手が存在しなくても恋情に関する場合はワシが選ばれる可能性のあることを示している。

## 五 まとめ

俗語訳の一人称代名詞として、高頻度語であり、上位1、2位を占めるワシ・オレを取り上げ、両語の性格の違いを、「1歌人の性差」、「2和歌の読み手の有無」の2点から考察してきた。繰り返しになるが、考察の結果

をまとめると、次のようになる。

第一に、歌人の性差に注目し検討した結果、「不詳」を除くと、ワシ（ワシガ）は「男性」「女性」共有、オレ（オレガ）「オレヤ」は「男性」専有、ワシヤは「女性」専有の一人称代名詞であることが確認された。

第二に、ワシ・オレを併用する男性歌人を対象に、歌人の身分・階級を手がかりに訳し分けの基準を探ったが、ワシ専用、オレ専用、ワシ・オレ併用歌人とがあり、専用組は詠歌数が総じて少なく、併用組は詠歌数が多いという結果を確認するに止まった。併用組が存在することは、作者の身分・階級ではなく、相手との関係が関与しているとも解せるので、読み手の有無を検討することにした。

第三に、和歌の読み手の有無を基準に分類したが、結果として男性歌人の場合、ワシは「A存在」、オレは「B不在」との関連が強いことが判明した。また「A存在」の場合、作者が外向的姿勢を取るときにはワシが、内向的姿勢を取るときにはオレが使われる傾向がある。故人の場合は、目上の相手（亡父）を悼む時にはワシが、目下、同等（亡妹、亡従兄弟）を悼むときにはオレが使われることが分かった。

「B不在」では、逆境にある作者の心情を詠ったものが大半を占め、オレが優勢だが、ただし恋情を客観的に詠いあげている場合はワシが出現することが確認された。

以上のように、男性歌人が併用するワシ・オレは、特に読み手存在の有無を尺度として訳し分けられていることから判断すれば、宣長は両者を性格の違う一人称代名詞として認識していたことが窺える。ワシはどちらかと言えば、相手が存在するときに使用する、すなわち仁田義雄の言う〈聞き手存在発話〉における「丁寧体」に相当するものといえよう。故人の場合、目上である亡父に対して使用しているのは、その証明ともなる。また内向的より外向的表現に向いた代名詞と言うこともできる。それに対し、オレは、〈聞き手不在発話〉で使用する場合、敬意は認められない代名詞と言えるのではないか。従ってそれが相手を意識しない内向的表現に多く出現し、あるいは故人の場合、亡妹などの目下に対して使用するのも、「丁寧さ」を必要としないためと解せる。



このワシ・オレに見る「丁寧さ」の有無が、同時代の他の作品ではどうなっているか、また近代とどのように関わっていくのか、今後の検討課題としたい。

注1 「古今集遠鏡」における一人称代名詞「文藝言語研究『言語篇』」34

筑波大学文芸・言語学系紀要 1998・10・30

2 拙稿(注1)の数値と本稿の数値が一、二例相違する結果となったので、次に「拙稿 本稿」の順で示しておく。  
ワシヤ(21・22)、オレ・オレガ(119・115)、オレヤ(1・3)

3 正保勇「コソア」の体系(『日本語の指示詞』国立国語研究所1981(初版) 1987(3刷))

### 参考文献

1 井上豊「近世の作品と敬語—白石、真淵、宣長の敬語使用—」『近世の敬語 敬語講座(4)』

明治書院 1973

2 久曾神昇「古今和歌集(一)〜(四)」講談社学術文庫 1982(第1刷) 1999(第15刷)

3 小島俊夫「日本敬語史研究」笠間書院 1998・9

4 小松寿雄「オレ・ソチ・ソナタ・ワッチ・ワタイ—明治東京語女性人称形成の一考察—」

『国語語彙史の研究 十九』国語語彙史研究会編 和泉書院 2000・3

5 杉崎夏夫「浮世床」に於ける自称代名詞(一)(二)『武蔵野女子大学紀要』VOL.28・29

武蔵野女子大学文化学会1993 武蔵野女子大学紀要編集委員会1994

6 竹岡正夫「古今和歌集全評釈上・下」右文書院 1976

7 仁田義雄「日本語のモダリティと人称」1991 ひつじ書房